「現代国語」における明治文学作品の取り扱い方について

——「舞姫」および「浮雲」の指導を中心として——

米　山　　誠

〔内容の項目〕

Ⅰ　まえがき ——「現代国語」における明治文学指導の意義——
Ⅱ　教科書に採られた明治文学作品
Ⅲ　明治文学に対する生徒の意識と読書傾向
1.　明治文学に対する生徒の読書傾向
2.　明治文学に対する生徒の意識
Ⅳ　「舞姫」および「浮雲」の指導
1.　「舞姫」と「浮雲」をとりあげた理由
2.　指導の目標・計画・準備
3.　「舞姫」の指導
(1)　教科書における教材化の問題点
(2)　指導の実際
(3)　授業に対する生徒の感想
(4)　作品に対する生徒の感想
4.　「浮雲」の指導
(1)　生徒の読書の実態
(2)　教科書に採られた二葉亭の作品
(3)　「浮雲」教材化の試み
(4)　指導の実際
(5)　授業と作品とに対する生徒の感想
5.　「舞姫」および「浮雲」の指導に対する反省
Ⅴ　あとがき

Ⅰ　まえがき —「現代国語」における明治文学指導の意義—

昭和38年度以降実施されている現行の指導要領によって，国語科の中で「現代国語」と「古典」とが，はっきりと分けられたのであるが，その案が出された当初から，古典文学と現代文学とを時代によって機械的に区分する仕方が，私には気がかりであった。そして，その中で，明治の古典的な諸作品は，どう取り扱われることになるのだろうかということが，私の疑問点であった。たしかに，指導要領では，「現代国語」の教材は「明治以降のもの」とされているが，実際には，「現代国語」の目標が，「生活に必要な国語の能力を高め」「現代の言語生活に適応できるようにし」とうたわれているものであってみれば，すでに，現代の生活から遠くなりつつある明治の作品，とくに文語のものなどは，実用主義的な「現代国語」の教材として採り上げられることが少なくなっても当然のことであろう。現に「現代国語」の各教科書の教材の中での明治の文章の占める率は微々たるものといってもよい。だから，そうした「古典」ときりはなされた形の「現代国語」に慣れてくると，教師も生徒も，その中でたまに，明治の文語教材に出会ったとき，「現代国語」らしくないというとまどいを感じたり敬遠したくなったりしたとしても不思議ではない。

一方では，世上でも学校でも，「現代の青年は，古典が読めない。明治の漱石や鷗外のものさえ，ろくに読めやしない。」などとしきりにいわれる。しかし，考えてみると，このことの責任はいったいどこにあるのだろうか。これは，生徒たちに明治の作品にふれさせたり，当時の文章に親しませたりする機会をつくること，指導することを怠ってきた現代の国語教育のあり方に問題があると思われる。

ところで，本来，作品の現代性ということは，年代の新しさで決められるものでないことはいうまでもない。その作品のもつ内容の性質によって判断されるべきものである。内容的には，明治の作品の中に最近の作品よりも新しさを感じさせるものがありうるし，最近の作品でも，明治の作品より古く感じられるものがありうるのである。そこで，大切なことは，「現代国語」や「古典」の授業を受ける生徒たち自身が，授業

になにを求めているかということである。私たちは，もっと生徒の立場に立って教材の選択や，指導の方法を考えなくてはいけないように思う。生徒たちが，表面的には受験のための知識や，日常生活に役立つ知識を求めているように見えても，心の奥底で求めているものは，彼らの人生観や社会観を育ててくれる教材や適切な指導であり，そうした人格形成のための学習に必要な学力なのである。私たちは，そのような生徒の内面的な要求にこたえうる教育の目標を明確にし，教材選択や指導方法を研究していかなければならないと思う。

明治の文学に対する生徒の意識を調べてみると，関心をもっているものが，予想以上に多いのである。いや，ほとんどのものが関心をもっているといってもよい。関心はあるのだが，文章がむずかしいので，読む気がしないとか，なじめないとかいう意見が多いのである。文章に抵抗を感じて，いわば，「食わずぎらい」になっているものが多いといってもよい。これは適切な教材を選択し，適切な指導の機会を多くする必要があることを示しているように思う。「現代国語」の中で，文学・文学史・文章史などを指導しようとすれば，そのための教材として，まず，明治文学の中から教材を選択しなければならないはずである。今後，「現代国語」は，近代日本の文学遺産を，生徒たちに正しくうけつがせていくことを考えなければならないと思う。明治の諸作品，いいかえれば，近代日本文学の古典を，自分たちの民族のすぐれた文化遺産として，生徒たちが認識するとき，「江戸時代まで」のいわゆる「古典」に対する意識も変わってくるのではないだろうか。近代文学につながる「古典」という意義を再認識して，いきいきとした興味を示す可能性があらわれてくるのではないだろうか。そして明治以来の文学を，系統的に関連づけながら学習するときに，はじめて，指導要領のいうように，「言語文化に対する理解を深め，思考力・批判力を伸ばし，心情を豊かに」する可能性が生まれてくるのではないだろうか。

明治文学の中には，文学教育の教材としてのすぐれた条件をもつ作品が，かなり存在すると思う。近代日本の黎明期における浪漫主義や批判的リアリズムの文学などの内容的な新しさは，かならず，生徒たちの興味や問題意識をよび起こし，人生，社会，個人，家，国家，文明，道徳……等々，日本の近代の特質について考えさせ現代につながるさまざまの問題点を発見させることであろう。そして，それを自分たちの現実の問題と結びつけて，考えたり，話したり，書いたりさせることであろう。私たちは，そのような作品を見い出し，教材化して，生徒たちに指導することを考えなければならない。指導を実践してみて，生徒たちの反応の状況から，教材選択の基準，教材化の方法，指導の方法などを再検討し，よりいっそう明確なものにしていかなければならない。

以上のような考え方の上に立って，私は，「舞姫」と「浮雲」をとり上げ，文学として，文体として，文学史として，できるだけ，この二つの典型的な明治の作品を関連づけながら指導することを試みた。

以下は，きわめて未熟な実践であるが，その記録である。

Ⅱ　教科書に採られた明治文学作品

現行の「現代国語」教科書のうち，12種類のものによって，明治の文学作品（主として小説）が，どれだけ，とり上げられているかについて調べてみた。「近代小説」または「近代文学」の単元名の下に配列された，散文教材だけを調査の対象としたので，片手落ちではあるが，ここでは韻文教材は省略する。以下，作者名，作品名，発表年，それをのせた教科書の略号などを記しておく。順序は年代順である。なお○印のものは文語体の作品である。教科書の（　）内の数字は対象学年である。

○ 1　鷗外「舞姫」（明治23年）　大日本（二）
　　好学（三）
　　尚学(三)実教(三)
　　筑摩（三）
　　三省堂（三）
○ 2　透谷「漫　罵」（明治26年）大日本（二）
○ 3　一葉「塵中日記」（〃26年）三省堂（二）
○ 4　〃「大つごもり」（〃27年）東書（三）
○ 5　〃「たけくらべ」（〃28年）角川（三）
○ 6　独歩「たき火」（〃34年）書院（二）
　 7　〃「春の鳥」（〃37年）尚学（二）
　 8　漱石「吾が輩は猫である」（〃38年）書院(二)
　 9　〃「三四郎」（〃41年）教図（一）　秀英（一）　三省堂(三)
　　東書（二）
　10　直哉「網走りまで」（〃41年）筑摩（一）
　11　漱石「それから」（〃42年）尚学（三）
　12　荷風「きつね」（〃42年）書院（一）
　　東書（一）
　13　藤村「家」（〃43年）大日本（三）

以上の他に，「文体」「文章」または「作文」その他の単元名の下に，すなわち，文学鑑賞以外の目的によって，とり上げられた教材を示すとつぎのようなものである。○印は文語体の作品である。

○1　福沢「学問のすゝめ」（明治5年）大日本（一）
　　筑摩（一）
○2　独歩「武蔵野」　（明治34年）秀英（二）
○3　子規「仰臥漫録」　（〃35年）角川（二）
○4　〃　「病牀六尺」　（〃35年）角川（二）
○5　〃　「日　記」　（〃　）大日本（二）
6　二葉亭「余が言文一致の由来」（〃39年）大日本（三）
　　筑摩（一）
7　〃「余が翻訳の基準」（〃39年）明治（三）
8　啄木「食ふべき詩」　（〃42年）大日本（三）
　　筑摩（一）

以上の資料によってみると，文学鑑賞のための散文教材としてとり上げられた明治の作品が12種類の教科書全体を通じて，のべ21回（平均1.8回）にすぎない。文学鑑賞以外の目的でとり上げられたものをふくめてみても，のべ30回（平均2.5回）にすぎない。12種類の教科書を通じての，すべての文学鑑賞用の散文教材の数に対する，明治の作品の比率は20%以下であろう。個々の作品についていえば，数多い明治文学作品の中から，なぜ，これらの作品だけがとり上げられているのか，という必然性を示す根拠がはっきりしない。文学教育のための明確な教材選択基準によったものとは思われない。各教科書の文学教材配列の一覧表の中に，これらの作品をそれぞれ位置づけてみても，他の教材との関連が明確でないものが多い。

なお，参考のために，明治期と限定せずに，12種の教科書の中でもっとも多く採られている作品を示すと次の通りである。（　）の中は，それをのせた教科書の数である。

①「舞姫」（6），②「夜明け前」（5），③「山月記」（5），④「三四郎」（4），⑤「高瀬舟」（4）⑥「伊豆の踊り子」（4），⑦「鼻」（3），⑧「生まれいづる悩み」（3），⑨「山椒魚」（3），⑩「俘虜記」（3），⑪「暗夜行路」（3）

これらの作品と他の作品との組み合わせ方や，全文学教材の傾向などを調べてみると基準らしいものが見いだされると思うが，ここでは省略する。

Ⅲ　明治文学に対する生徒の意識と読書傾向

次の調査は，いずれも，本校の高校3年生を対象として，43年7月に実施したものである。

1　明治文学に対する生徒の読書傾向

調査の方法は，教科書巻末の「日本近代文学史年表」の中から，明治初年以後，明治末年までの主要な作品を，約100編選んで列挙した一覧表の中で，読んだことのあるものに○印をつけ，いつ頃，どんな動機で読んだかについて簡潔に記入するという形式のアンケートによった。なお，調査方法の不備のために，きわめて不正確な結果しか得られなかったが，それでも全体の傾向はわかると思うので，よく読まれているもの20編の作品名と，それを読んだ生徒の人数を記しておく。この数字は，その作品を一部分だけ読んだというものもふくまれているので，あいまいな点があることを考慮する必要がある。

(1) 坊っちゃん	123名	(8) たけくらべ	31名
(2) 吾が輩は猫である	108〃	(9) 金色夜叉	28〃
(3) 三四郎	68〃	(10) 舞　姫	27〃
(4) 破　戒	56〃	(11) 門	23〃
(5) それから	48〃	(12) お目出度き人	20〃
(6) 武蔵野	42〃	(12) 雁	20〃
(7) 草　枕	41〃	(14) 五重の塔	19〃
(15) にごりえ	17名	(19) 不如帰	12名
(15) 虞美人草	17〃	(20) 田舎教師	11〃
(17) 牛肉と馬鈴薯	15〃	(20) 土	11〃
(18) 浮　雲	14〃		

（調査の対象人員は134名）

これらの作品を読んだ時期は，中学2・3年，高校1・2年の間で，読んだ動機としては，「店で見つけて面白そうだったから」「家にあったから」「有名だから」のようなものもあるが，「国語や社会の授業で推薦されたから」「担任の先生から紹介されたので」「図書館にあったので」「図書館の推薦書のリストに入っているので」「夏休みの読書感想文の宿題を書くために」「友人が読めと貸してくれたから」等が多かった。学校での読書指導の意義の大きさをあらためて教えられる。なお，大正期の作品に対する読書傾向も調査したので，その結果を比較してみると参考になるが，紙面がないので省略する。

2　明治文学に対する生徒の意識

次の調査は，上の読書傾向の調査と同じ頃（43年7月）実施したものである。（調査対象人員は92名）

(1)「あなたは明治の文学に対してどの程度関心がありますか」という問いに対して，

㋐「非常に関心がある」と答えたものが19名(21%)

㋑「多少関心がある」と答えたものが50名（54%）
㋒「ほとんど関心がない」と答えたものが23名（25%）

であった。㋐と㋑を合わせて，とにかく「関心がある」というものは，全体の75%ということになる。

関心のある理由としては，①「明治という近代文化創造期の息吹にふれてみたいから」②「文章の調子が現代文と異なって興味があるから」等の意見に代表される。

関心のない理由としては，①「ことばが難解で読む気がしないから」というものが大部分で，その他は，②明治という時代が封建的な暗い感じだから」というような類のものであった。

(2)「明治文学の中の文語文に対してどう感じますか」という問いに対しては，その答えを主に次のような二つの種類にまとめることができる。すなわち，①「とっつきにくく，また，よく理解できないが，古典の文章にも現代文にもない独特の興味を感ずる」というものと，②「古典と同じで，むずかしいので興味をひかれない」というものである。なお，この①と②との人数はほぼ同程度であった。

以上の(1)，(2)の調査結果によってみると，要するに，多くの生徒は，明治の文学に対しても明治の文章に対しても関心をもっているということと，それにもかかわらず文章がむずかしくてよく理解できないと感じているということがいえると思う。

(3)「明治という時代について，どんな感じをいだきますか」という問いに対しては，答え方がさまざまの文で表現されているが，代表的な3種類の文をつぎに並べてみよう。

① 「封建的な暗さを感じると同時に，国全体が躍動しているように感じられる。スケールの大きな人物が多かったように思う。現代にはない魅力を感ずる。」
② 「日本が西洋から新しい文化をうけ入れ，産業が急速に進歩した一方，表面的なものだけをうけ入れたために，古い伝統と新しい文化が統合されず，封建的官僚機構の下で庶民が苦しめられた時代で，人間性が尊重されず，非民主的な体制がつくられたことは残念である。」
③ 「現代人にはピンとこない。遠い過去のことで，われわれには関係のない時代のように感じられる。」

以上のように，三つの類に分けられるが，全体としては，②のような感想がもっとも多数であった。次いで①のような感想が多かった。③のような感想は少数である。全体として言えることは，無条件に明治時代はすばらしかったという種類の感想はほとんどなく，肯定的なものにせよ否定的なものにせよ，封建的な暗さを感じているものが大部分だということである。近代日本史の知識や，現実の社会との比較の上で，イメージを描いているものが多く，「明治100年」の政治的世俗的な宣伝に惑わされているものは少なかった。

以上の，明治文学に対する生徒の読書傾向および意識傾向に関する調査の結果から大雑把には，次のようなことが言えると思う。つまり，生徒たちが明治文学をあまり読んでいないことは事実として認められるけれども，これは，明治文学に対する無関心のためではなく，それを知る機会や読む機会が少ないことと，ことばがむずかしく感じられることのためだということである。明治の文学に対しても，また時代に対しても，大部分の生徒が，健全な知的関心または情緒的関心をもっているといってよいと思う。そのことは，明治文学を教材としてとりあげ指導するための，きわめて大切な要件として自信をもってよいことである。したがって，指導上の直接的な問題点としては，ことばの抵抗をいかにして克服していくかということでありそのための具体的な指導方法を考えなければならないということである。

Ⅳ 「舞姫」および「浮雲」の指導

1 「舞姫」と「浮雲」をとり上げた理由

個人的な経験について述べると，私にとって，「舞姫」を授業で教えたことは過去に2度ある。1度目は，公立高校の商業科3年生に対して，「筑摩」の「現代国語」によって指導した。そのときは，「古典」を学習する機会の少ない生徒たち（職業課程での「古典」は普通，3年間に2単位だけである）が対象だったので，語句や文の説明を加えながら口語訳していくという，いわば，「古典」に近い授業の方法をとった。しかし，生徒たちは，予想以上にこの教材に興味を寄せ，現代につながる人生や社会などの問題点を見いだしたり，文体の美しさに気づいたりして，授業中や授業後に活発な質問や意見が出された。また，すぐれた感想文も書かれた。私にとっては，それが「現代国語」の中で明治の文語体の小説を取り扱った最初の経験であった。

2度目は，他の公立高校の普通科2年生を対象として指導をした。このときは，教科書にこの作品がのっていなかったが，ぜひ，1度目の経験を活かしてみたいと思って，自分で教材を準備（「筑摩」の教材と同じものをプリント）して，とりあげてみたのであった。このときも，前の経験にしたがって10時間以上かけて，解釈しながら鑑賞をすすめる方法をとったが，文語文への自信をもたせることや，文学史への関心をもたせることに心がけた。結果は，1度目と同じように，生徒の表情や態度にも感想文にも，生き生きした反応が見られた。とくに，感想文には，問題意識にあふれたものが多かった。このようにして，私は「舞姫」の教材としての価値を見いだしたように思った。それ以後は，もっと明確な意図と周到な計画・準備の下に，この教材を取り扱ってみたいと考えるようになった。また，この教材のように，内容的にも文章的にも，生徒に文学鑑賞のよろこびを味わわせうるような教材を，他にもっと見つけ出していくことの必要性を痛感するようになった。

以上の2度の経験の上に立って，本年度は3度目の「舞姫」指導を行なうことになった。使用教科書（「尚学」(三)）にはこの教科がのっていたので，好都合であった。今度は，「舞姫」の鑑賞を深めさせたり，文体の特徴を理解させたり，あるいは，具体的な作品に基づく文学史的な認識をもたせたりするために，できるだけ効果的に，他の文学作品や資料を教材として用意し，それぞれ関連づけながら指導してみたいと思った。そのような意味で，二葉亭の「浮雲」がもっとも適当な教材になると判断したのであった。内容や文体における「舞姫」との類似性や対照性において，もっとも興味ぶかく関連づけることができるのではないかと考えたのである。「浮雲」は「舞姫」と同じように，あるいは，もっとちがった形で，生徒に興味や問題意識をよび起こし，いろいろと考えさせることができるだろうと期待をかけたのである。この近代日本の出発点に位置づけられる作品を，無味乾燥な文学史の断片的な知識として暗記させることなく，身近な文学作品として鑑賞させ，理解させたいと考えた。また，生徒の読書に対する関心や領域を，鷗外から二葉亭にまで発展させていくこともできるのではないかとも考えた。大体において，以上が，この2作品を取り扱うことにした，私なりの理由である。

2　指導の目標・計画・準備

(1)　**指導の目標**――「教材としてとり上げた理由」のところで述べたことと重なることになるが，ここでは，「舞姫」「浮雲」の他，漱石の「それから」をふくめた「小説」単元の目標として，私が考えたことを簡潔に記しておく。

① 明治の小説を鑑賞することによって興味を実感させ，鑑賞力に自信をもたせる。

② 日本の近代小説の鑑賞の仕方を体得させる。

③ 作品の内容に基づいて，日本の近代社会やその中での人間の性格や生き方などの問題を自分たちの現実と関連づけて考えさせる。

④ 明治の小説の文体に直接にふれさせることによって関心をもたせ，現代の文章とのつながりについて考えさせる。

⑤ 近代日本文学史の流れを，近代日本史の知識と関連させながら理解させる。

⑥ 明治文学への読書意欲をよび起こし，自主的に読書するようにすすめる。

⑦ 文学鑑賞によって感じたことなどを，自分のことばで，発言したり，感想文にまとめたりすることができるに訓練する。

(2)　**指導の計画・準備**――指導の対象は，本校高3の生徒全員（3クラス）である。使用教科書は「尚学」の「現代国語3」である。この教科書には，「小説」単元として，鷗外「舞姫」と漱石「それから」の2作品と猪野謙二「漱石と鷗外」という参考文がのせられている。なお，この「尚学」の「現代国語」が，1学年および2学年のためにとり上げている「小説」教材は，1学年で，「形」「鼻」「城の崎にて」「山椒魚」「潮騒」，2学年で，「春の鳥」「闇の絵巻」「チボー家の人々」となっている。したがって，生徒たちにとって，「現代国語」で明治の小説に接したのは，2学年での独歩の「春の鳥」(明治37年)だけであり，文語の小説教材に接した経験はなく，また，小説教材として，鷗外，漱石，二葉亭の作品に接した経験もないわけである。そこで，第3学年の「小説」単元としては，さいわいに，「舞姫」と「それから」がのせられているので，その「舞姫」のあとに，「浮雲」を自主的な教材として入れることにした。そして，その他，関連のある作品や文学史的な参考資料などを用いながらできるだけ具体的な指導にしたいと考えた。

2学期にその「小説」単元を扱うためには，1学期のうちに，大体の計画を立てて準備する必要がある。そこで，7月に，生徒の，明治文学に対する意識や読書傾向についての調査（Ⅱ・Ⅲに記したもの）を行なうとともに，「舞姫」「浮雲」に関する簡単な予備調査を行ない，その結果によって，夏休みの読書指導や課題などを考えることにした。「舞姫」と「浮雲」が，授業とは関係なく，7月の段階ですでにどの程度読まれているか，そして，どう感じているかという簡単な調査の結果は次のようであった。「舞姫」を読んでいたものが，全体の20%，読んでいないものが80%

であった。その20%の読んだものも，大半は，「読むには読んだが，理解できなかった」ということであった。「浮雲」の場合は，読んだものが，10%で，読んでいないものは90%であった。そして，これも，「よく理解できず興味を感じなかった」「有名なので読みはじめたが，わかりにくかったので途中で止めた」というものがほとんどであった。このような実態を考慮に入れて指導方法を考えてみることとした。生徒に対しては，この両作品の読書を夏休みの宿題とした。

なお，夏休み中に，この作品以外にも，鷗外，二葉亭，漱石などを中心として明治の作品をできるだけ読んでおくようにすすめた。

3　「舞姫」の指導

（1）教科書における教材化の問題点

「尚学」の「現代国語3」の「舞姫」を，原文と校合してみると，後述するように，他の教科書の場合に比べれば，全文に近い形でのせているが，2箇所の削除と，それに伴なう1箇所の書き変えが行なわれている。削除箇所の第1は，教科書116ページ3行目の「かの人々のあざけるはさることなり。されどねたむはおろかならずや。この弱くふびんなる心を。」の後につづくべき，原文の「赤く白く面を塗りて，赫然たる色の衣を纏ひ，珈琲店に坐して客を延く女をみては，往きてこれに就かん勇気なく，高き帽を戴き，眼鏡に鼻を挾ませて，普魯西にては貴族めきたる鼻音にて物言ふ『レエベマン』を見ては，往きてこれと遊ばん勇気なし。」という部分である。書き変えの1箇所は，この削除の文につづく，原文の「此等の勇気なければ」が「かくも勇気なければ」となっているところである。削除箇所の第2は，教科書128ページ10～11行目の「かれは医者に見せしに常ならぬ身なりといふ。」につづくべき原文の「貧血の性なりしゆゑ，幾月か心づかでありけん。」という部分である。

原文との異同は，以上の3箇所である。作品全体の大体の鑑賞のためには差支えないようでも，その部分をていねいに読むと文脈的に不自然なことは当然である。教科書には削除していることについて，なんの弁明も記されていないから，原文の表現が不自然であるかのように誤解されるおそれがある。教育的な配慮で削除したようだが，国語教育的な配慮からいえば，問題がある。教育的にみても，とくに，この部分を削除する必要はないように思う。

現行の「現代国語」教科書のうち，12種のものを調べたところ，「尚学」をふくめて，6種のものが，小説教材として「舞姫」をのせているが，いずれも，そのとり上げ方に問題がある。参考のために，「尚学」以外の教科書の場合を記してみたい。なお，「尚学」で削除された箇所を原文のままにのせているものは一つもない。

「筑摩」は，「尚学」とほとんど同じ形である。ただ，原文の「此等の勇気なければ」の箇所が「勇気なければ」とされている。（「尚学」は「かくも」と改変）

「好学」は，途中の部分，原文の約⅓が省略されている。主人公とエリスとの出会いのところ，主人公が職を免ぜられ，また，母の死の報をうけとるところ，エリスの妊娠を知るところ，等，いずれも作品全体の中で，重要な意味をもつ箇所が省略されている。

「三省堂」は，文章の最初の部分が，原文の約⅕ほど省略。それは，主人公が自由なヨーロッパ社会の風にふれ，近代的な自我に目覚めていく過程が，簡潔に美しく表現された部分で，作品鑑賞の上で不可欠と思われるところであるが除かれている。この教科書では，この小説鑑賞の主なねらいを「近代日本における自我の覚醒」の苦悩の跡を探ぐることにおいているだけに，削除の仕方がとくにおかしい。

「実教」，「大日本」は，前者においては，5箇所にわたり原文の約半分が省略，後者においては，5箇所にわたつて約⅕が省略され，短い解説文で補っている。

以上の実態をみると，「舞姫」が教科書にのせられているとはいっても，この場合，「尚学」と「筑摩」の2種以外は，文学鑑賞の教材としては不適当といってもよいと思う。「舞姫」の教材としての利点の一つは，実は，長編小説の抜粋などとちがって，短編としての首尾一貫した完結性にあるはずである。それにもかかわらず，形を失わなせるほどにして教材化しているのはなぜだろうか。大きな問題である。私たちは，文学教材（文学に限らないが）を取り扱う場合，長編のものはやむをえないとしても，文学として，できる限り完全な形で生徒に与え，内容や文章の鑑賞が歪みなく正しく行なわれるようにしなくてはならない。

なお，鷗外の作品が，現行の教科書に，どの程度採られているかについて，12種の教科書を調べてみたところ，次のようであった。

「舞姫」の6種の他，「高瀬舟」4種（秀英（一）教図(一)東書（二)書院（一）・「最後の一句」2種（角川（一）書院（一）・「寒山拾得」1種（教図（三）以上四つの小説が，のべ13種の教科書に採られていることがわかる。多くの場合，漱石の作品（主に「三四郎」）と組み合わされているが，必ずしも系統的な扱いがなされているわけではない。

（2）指導の実際

指導の方針としては，十分な読解の上に立って，文学として正確に鑑賞させることにつとめた。前述の調

査でわかるように，多くの生徒は，明治文学に対して関心をもちながらも，文章のとっつきにくさが抵抗となっているのである。とくに，文語文の場合ははじめから敬遠しているきらいがある。このような実態に対しては，ていねいに語句の解釈，文章の特徴や時代的，社会的背景の説明などを行なわなければならない。夏休みの宿題として読んでおくようにさせたが，2学期になってきいてみると，「大体理解できた」というものは，非常に少なかった。

具体的な授業の進め方としては，この作品に10時間かける予定で，毎時，平均3ページ程度の進度にして，生徒たちの質問や感想・意見を中心にしながら説明を加えていくという方法をとった。特別な授業形態は考えなかった。全体を終えるまでに要した時間数は，13時間であった。（教科書指導書では6時間で計画されている。）授業の中で，「うたかたの記」「文つかひ」また「妄想」などの作品も話題とし，生徒に紹介した。また，鷗外の簡略な年譜を与えて，参照させ，作者と作品との関係について考えることもさせた。

なお，指導の上で留意したことは次のような点である。

第1は，語句や文章の解釈にこだわると，生徒の主体的な文学鑑賞の姿勢が失われやすいこと，そして，主体的に問題意識をもたないままの解釈だけでは，この作品の内容が，単純な，恋愛と出世との相克の物語として受けとられやすいということである。この点に対しては，生徒たちから出された疑問や意見を中心として，鑑賞上の主眼点となるようなことをいくつか問題点として整理したうえ，生徒に提起し，作品鑑賞中いつもそれらの問題を考えるようにさせた。そして，私の方からの安易な解説は控えることにつとめた。問題として提起したことは次のような諸事項である。

① 作品の主題について。
② 主人公の性格や生き方について。
③ 主人公のエリスに対する愛情について。
④ 相沢の主人公に対する友情について。
⑤ 作品の背景となっている時代や社会について。
⑥ 文体の特徴について。
⑦ 印象的な場面について。
⑧ 作品に対する疑問点について。

これらの問題点について考えさせながら鑑賞をすすめ，最後に，それらの主な点について，考えたことを感想文としてまとめさせるようにした。

第2の留意点としては，筋の展開につれて，生徒は主人公と作者とを同一視しやすいので，小説における創作と事実との関係について説明し，注意した。

第3には，生徒たちが作品や作者の高名度にとらわれた観念的な頭で読まないように注意した。

（3）授業に対する生徒の感想

「舞姫」の学習が終了した後，全員に「授業に対する感想」をアンケートの形で書かせた。以下はその結果である。

a　「『舞姫』を授業で鑑賞して興味を感じましたか」という問いに対して，㋐「非常に興味があった」㋑「ある程度興味があった」㋒「興味をほとんど感じなかつた」の，いずれかで答え，その理由を記入するという形式であるが，㋐と答えたものが133名中57名（43%）㋑と答えたものが62名(47%)㋒と答えたものが14名(10%)であった。㋐と㋑と合わせて90%のものが，程度の差こそあれ，「興味があった」と答えているわけだが，興味を感じた理由の主なものは，第1に，小説の内容に関するものであり，第2には，文体に関するものであった。第1の場合の代表的なものをあげると，「人間の幸福・愛情・立身出世等，現代に通ずる人間や社会の問題について考えさせられた」「主人公の性格や態度，生き方からいろいろ考えさせられた」「作品の時代的社会的な背景，明治の文明開化の日本における官僚社会の姿や当時の青年の生き方，ヨーロッパの空気と日本のそれとのちがい，などを知って参考になった」というような理由である。第2の場合の代表的な例をあげると，「明治の文語体の文章など，ひとりで読んでも理解できず，なんの親しみも感じなかったのが，今度，授業でやって，はじめて，よく理解できた。文章の美しさ，語調のよさに新鮮な魅力を感じた。」「明治の初期の作品などこれまでに読んだことがなかったので珍らしかった。」等である。第1の類の理由を述べたものが，興味を感じたもの全体の44%，第2の類の理由を述べたものが43%であった。以上の第1，第2以外の理由としては，「ストーリーの面白さ」「ロマンチックな恋愛小説のおもしろさ」という類のものが10%，「鷗外の作品だから」とか「文学史上価値が高いから」という類の，先入観にしばられた理由をあげたものは3%であつた。

次に㋒「興味を感じなかった」と答えたもの（10%）が，その理由として述べていることは，「文章がよみにくく，また，現代的な感じがなく，わからないことが多かつたから」「内容が単純でつまらなかつた。」「授業でやると，時間ごとにとぎれて印象が薄くなる。」等であった。

全体としてみれば，大部分の生徒が，かなり積極的な理由で興味を感じた，とみてよいように思う。

b　「授業の進め方に対してどう思いましたか。」という問いに対して，自由に意見を記させたのである

が，その意見の大体の傾向は次のようである。

「この授業の方法に賛成，説明や話し合いによって内容がよくわかった」「文学の背景となっている時代や社会の状況が理解できた。」「私自身のものの考え方と主人公のそれとを比較できてよかった。」「たくさんの教材をざっと読みとばしていくよりも，こうして一つの教材をくわしくやった方が興味もあり，充実感もあり，得る所が大きい」「ゆっくり時間をかけすぎたと思うが，結果的には，作品がよく理解できたのでよかったと思う。」というような賛成的な意見が，全体の約70%である。それに対して，否定的または批判的な意見は30%でその主なものをあげると，「語句や文章の解釈が細かすぎて，くどい感じだ。もっと大ざっぱでよいから早く進んだ方がよい。」「少しずつ区切りながら進むのは，文学の味を失わせる。」「先生が一人でやりすぎる。もっと生徒にグループ討議などの形で活発に話し合わせてほしかった。」などである。

私としては，30%の批判的な意見に対して，自分で思い当たることが多く，いろいろと教えられた。とくに，「もっと生徒にグループ討議などの形で活発に話し合わせてほしかった。」という類の意見に対しては反省させられることが多い。これらの批判的な意見を十分に尊重して，今後の指導方法を考えていきたい。

（4）作品に対する生徒の感想

(3)で紹介したアンケートと同じときに，「舞姫」の作品に対する感想を，数項目の問題点別に書かせた。以下はその問題点の項目と，それに対する生徒の感想文である。

a　「『舞姫』を読んで，つよく感じたこと」という質問に対しては，さまざまの感想が出されたが，b以下の感想と重なることが多いので，ここでは，感想文の具体例の紹介は省略して，感想の傾向だけをまとめて記しておく。感想の内容としては，主人公の性格や生き方，明治社会の矛盾等と結びつけて考えているものが大部分であった。「明治の物語であっても，現在の日本の社会にも，そして，自分たちの生き方にもそのままあてはまる内容だと思った。」という一例が，そのような傾向を代表している。

b　「主人公の性格や生き方」について——

① 「自我の目覚めが不徹底だ。目覚めた以後の行動が自己中心的だ。一旦目覚めながら，結局，妥協し，自分の出世を願う彼の行動に矛盾があり，その弱さは許せない」

② 「太田を批判しようとするとき，私自身を省みて，はたしてどうだろう。私自身も彼のように迷うし，惰性的に行動することがある。彼の生き方，考え方に自分の心が映っているように感じることが何度かあった。したがって，彼を憎むことはできない。この気持は，私が自分を憎みながら憎みきれないのと通じているかもしれない。」

上の二つの感想文にみられるように，主人公の生き方を許せないとして批判する立場の感想と，批判はするが，やむをえないという同情的な感想，これらを合わせると，全体の70%以上であった。

c　「主人公のエリスに対する愛情」について——

① 「彼の愛は真実とは言えないと思う。彼にはその愛よりもっとつよい力で作用する立身出世という意識がつよくあった。いくら苦しんでも，彼の弱い心ではエリスの愛を維持する信念はなかった。結局，出世というものには勝てない，はかないものだった。」

② 「彼が彼女を裏切る結果となったことは，当時の背景を考えると当然のように感じる」

③ 「本当の愛であったと思う。激しく燃える愛であった。だから悩んだのだ。純粋でりっぱだと思う。」

以上の三つの感想文に示されるような類型に分けることができるが，もっと大きく，「彼の愛に疑問を感ずる」というものと，「真の愛だと思う」というものとの2種類に分けてみると，前者に属する感想が約70%で，後者に属する感想が23%であった。その他の感想が7%である。

d　「相沢の豊太郎に対する友情」について——

① 「出世第一主義から出た友情であることを残念に思う。そのため，エリスに対する人間性に欠ける。明治社会での友情は，こういう形であらわれてくるのか。親分肌の性格は，よい面もあるが，真実をみきわめることを誤ることがありがちなのではないか。」

② 「世間的常識から考えて相沢の処置は適切だといえるかもしれない。ぼくが彼の立場に立ったとしても，同様の処置をとったかもしれない。しかし，相沢は豊太郎の表面的な問題を解決しただけで，内面的なエリスとの関係は無視している。その点において，これは一方的な友情で，手放しに賛成することはできない。」

以上の二つの感想に代表されるような批判的なものが，全体の約60%を占めていた。「これこそ真の友情である」というように肯定的なものは30%以下であった。

e　「背景となっている時代や社会」について——

① 「上に対しては低くなり，下に対してはいばり，同僚に対しては牽制したり，蹴落としたりする立身出世主義には，当然のことながら反発を感ずる。現

在の社会にも形を留めることであるから，ただ反発ばかりではすまされないが。」

② 「型にはまった逆らわない人間，俗にいう優等生が優遇される傾向は，現代の官庁や会社などの中にもあるのではないか。」

③ 「封建性，権威，権力が支配して，他人への干渉がつよい。現在，明治100年などといって明治をよき時代と評価しているが，この作品を読んで，あらためて，再認識させられた。決してよき時代とは言えないと思う。」

以上のように，批判をふくんだ感想が全体の90％であった。

f 「とくに印象に残った場面」について――

① 「エリスが発狂し，それでも，豊太郎の看病をしているところ」

② 「豊太郎が，帰国か，エリスの愛かと悩みながら，公園をさまよい苦悶するところ」

③ 「エリスと豊太郎との最初の出合いのところ」

④ 「文章の最初の部分で，主人公がセイゴンの港の船中で悩んでいる，その時の気持を表現したところ」

⑤ 「豊太郎がロシヤから帰ってきたときのエリスの態度やことば」

主として以上のような場面が，印象的な場面としてあげられている。上からその場面を指摘した人数の多かった順である。

以上のa～fの項目に対する感想の他，「文体」についての感想，「作品に対する疑問点」についての感想等もあるが，ここでは省略する。また，こうした項目別の感想以外に，全体としての大きな感想文を書かせるべきだったと思うが，今回は残念ながら，実行している時間がなかった。

4 「浮雲」の指導

（1）生徒の読書の実態

夏休み前の調査によると，本校3年生全員の中で，この作品を，全部または部分的に，よんだことがあるというものは約10％であった。そこで「舞姫」とともに，この作品の読書を，夏休みの読書指導を兼ねて宿題にしておいたが，実際のところは，「努力して，読むには読んだが，あまりよくわからなかった」という意見が大半であった。なお，「浮雲」以外の二葉亭の作品がどの程度読まれているかというと，2学期，11月の調査によると次のような実態である。

「其面影」（2名），「平凡」（3名），「あひびき」（4名），「めぐりあひ」（4名），「うき草」（1名）その他（6名）（調査対象人員は 130名）

いわば，断片的な文学史的な知識としての「二葉亭」の名前や，「浮雲」「言文一致」，「ロシヤ文学紹介」などのことばは，大抵の生徒が憶えていても，作品そのものを読んで少しでも実体を知っている生徒は，ほとんどないといってよいような実態である。これは，中学，高校での国語科の教材の採り方や，読書指導に原因があると思われる。

（2）教科書に採られた二葉亭の作品

12種類の「現代国語」の教科書（昭和43年度）によって，私が調べたところでは，つぎのようなものが採られているにすぎない。

- 「余が言文一致の由来」および，参考文としての「浮雲」はしがき　　大日本（三）
- 「余が言文一致の由来」　　筑　摩（一）
- 「余が翻訳の基準」　　明　治（三）

要するに，いずれも文学としてではなく，「文章」または「作文」の単元のなかで，参考的にのせられているにすぎない。文学としては一つとして教材化されていない。文学としての作品をとり上げず，「文章」や「作文」の単元の中で，上記のような二葉亭の談話筆記「余が言文一致の由来」や「余が翻訳の基準」をとり上げてみたところで，「浮雲」という言文一致の作品そのもの，「あひびき」などの翻訳作品そのものを鑑賞しなければなんの意味もないと思われる。

「文章」や「作文」の単元のためにも，「浮雲」「あひびき」などは，ぜひ教材化すべきであると私は考える。ついでに言えば，近代文学の出発点に位置づけられる「浮雲」「舞姫」のうち，「舞姫」が6種の教科書に採られながら，一方「浮雲」は全く無視されているという事実が私には納得できない。

（3）「浮雲」教材化の試み

夏休みの読書の課題としたため，文庫本など自分で求めて持っている生徒も多かったが，それぞれ，形のちがう本で，注や解説などもさまざまなので，やはり，統一した教材を用意することにした。

長編小説の教材化やその作品指導は困難な仕事である。作品の本質を理解するのにふさわしい部分を抜粋し，しかも，作品全体の構想，主題なども把握できるような配慮が必要である。難解な語句や事項には適切な注釈がなければならない。私は「浮雲」の教材化にあたって，どうしたらよいかと考えながら，いく種類かの「浮雲」の本にあたってみた。結果としては，「近代文学鑑賞講座第1巻二葉亭四迷」（角川書店）の中での「浮雲」の取扱い方が一番教材化しやすく適切であると思い，その部分（P.86～P.113）の28ページ分をプリントして生徒に与えた。

そこには，原文から3箇所が抜粋されている。すなわち，その1は，原文第1編の第1回「アヽラ怪しの人の挙動」の章，その2は，第2編の第7回「団子坂の観菊」の章，その3は，第3編第18回の1部分である。そして，他の部分は，各章ごとのていねいな梗概

を述べて全体の作品の内容や展開の仕方も理解できるようになっており，また，難解な語句や事項には，教科書的な注が付けられている。

以上の教材を用いるかたわら，「浮雲」のリアリズムや言文一致の文体の特徴，また，その文学史的意義などを理解するための参考資料として，「小説総論」（抜粋），「余が言文一致の由来」（全文），「あひびき」（抜粋），秀英出版の「日本文学史」の二葉亭に関する部分，二葉亭の年譜等をプリントして生徒に与え，必要に応じて参照できるようにした。

（4）指導の実際

「舞姫」の指導を13時間かけて終えたあと，「浮雲」の指導に入り，教材の鑑賞を，予定の5時間で終えた。全文は各自で読むようにすすめた。

この場合，「舞姫」の場合に比べて抜粋や梗概による教材の物足りなさや指導の限界をつくづく感じさせられた。生徒たちも，ほぼ完結した形の「舞姫」の後だけに不足感を感じたようである。指導にあたつては，作品の構想，人物の性格や心理，時代的社会的な背景などに心を向けさせ，また，作者がなにを描きたかったのかについて考えさせることにつとめた。そして，近代文章の変革の過程の実体を確認させるようにつとめた。それらの内容面，文章面のすべての事項において，「舞姫」と比較関連させながら鑑賞させることが，きわめて効果的であった。

（5）授業と作品とに対する生徒の感想

「浮雲」の指導が終わった直後，生徒に対して，「授業に対する感想」をアンケートによって書かせた。以下はその結果である。（対象人員114名）

a　「授業で『浮雲』を鑑賞して興味を感じましたか」という問いに対して，㋐「非常に興味があった」と答えたものが26名（22%），㋑「興味を感じた」が68名(60%) ㋒「興味を感じなかった」が20名(18%)という結果で，㋐㋑を合わせて，82%のものが多少なりとも興味を感じたということがわかった。

㋐㋑の「興味を感じた」についての代表的な意見は次のようなものである。

① 「人間の個性が印象的で，それぞれの複雑な心の動きがいきいきと表現されていた。古典的な作品が意外に新鮮な感じなので見直した。」

② 「明治社会の矛盾がよくわかり，現代社会にも通じるところが多く，自分たちも直面しそうな問題がいろいろふくまれていたから。」

③ 「文章がくだけた感じでおもしろい。ユーモラスな表現で当時の社会を批判しているところがおもしろい。『舞姫』と比較しながら読むのが興味ぶかかった。」

これに対して㋒「興味を感じなかった」理由の代表的な意見は次のようなものである。

① 「すじが単純でつまらない」

② 「抜粋や梗概では印象に残らない」

③ 「時代的背景がピッタリ感じられない」等。

b　「『浮雲』を抜粋ではなく，始めから終りまで，自分で全部読み通してみたいと思いますか」という問いに対して，㋐「思う」と答えたものが79名（70%），㋑「思わない」が35名（30%）であった。

この「思わない」の30%の中には，授業できいているのは興味があるがけれども，自分で積極的に読むほどでもないというものが，いるのではないかと，aの㋒との比較によって考えられる。

c　「『浮雲』を読んで感じたこと」という題で，全員に自由に書かせた生徒の感想文の中から，もっとも代表的と思われるものを4編あげておく。

① 「二葉亭四迷の作品を読むのはこれがはじめてなので，はじめから興味がありました。今までは，明治時代の作品と聞いただけで，すぐに読みにくいものだと決めつけてしまって敬遠していたのですが，この『浮雲』を読んで，明治期の作品に大変興味がもてるようになりました。表現法も口語調で読みやすく，大した抵抗もなく読むことができました。

『舞姫』と同様，この『浮雲』も明治の官僚社会を背景にした作品で，当時の文明開化の社会を風刺したものですが，結局，最後には世渡りのうまい要領のよい人だけが出世して，安楽な生活を送り，自己に忠実に生きようとしたものは出世コースから没落してみじめな生活を送らなければならない。こんなことがあってよいものだろうか。現在においても，官僚社会に限られず，普通の会社においても，そのようなことが言えるのではないかと思います。この作品に出てくる「お勢」「お政」「本田昇」等の功利的な態度には大変反発を感じました。」

② 「私が最初に『浮雲』を読んだのは，今年の春休みであった。そのときは，おもしろいけれど主人公は煮えきらない男だし，他の人物もひどいのばかりで，ばかみたいだと感じた。そのことを，授業の『浮雲』が終わった今，私は猛烈に反省している。というのは，私が今まで，小説の上っつらしか見ていなかったということをひしひしと感じたからである。

二葉亭の文明批判は今だに通用する。新しいもの好きの「お勢」や，おべっかつかいの本田，優柔不断の文三……明治時代の官僚制度……等々，こういったものが，いっしょくたになって現代にうけつがれていると感じるときが，往々にしてある。その文明批判を明治も半ばにおいて，20代の青年が行なっていたのだと思うと感心するより他ない。言文一致

の文体によるこれらの表現は，当時においては，現在の方言をそのままあらわしたよりも，もっともっと乱暴なことのように思われたにちがいない。――とすれば，この小説は，彼が若かったからこそ，ここまで情熱を傾けて書くことができたのかもしれない。とにかく，二葉亭は日本の文学の方向を転換しえた大きな存在であり，『浮雲』はそういう位置を占める作品だということを，この授業でつくづく感じた。」

③「文章としては，やはり，いくら口語文でも少し古い感じをうけたが，題材，描写方法など，非常に新鮮で，なぜ，もっと早く読まなかったかと悔やまれるほどだ。すごい発見をした気持である。授業では，抜粋と概略だったので，細かい主人公たちの心の動きなどわからないが，実に写実的だと思う。私はそんなに本を読んでいる方ではないが，明治の作品が好きである。明治の作品は文章の中の言葉の端々に日本を感じさせる重みがあると思う。それは，もはや明治が古典的になり，漢語的な言葉が多かったからかもしれないが，なによりも，作家たちが心を整えて，新しい日本語で，大切に作品を作りあげようとする，そんな気迫が明治期の文章にみられると思う。それに，現代のものより新鮮に感じられるのはなぜだろう。」

④「『舞姫』に比べ，非常に乱雑でぎごちない文章だが，開拓者の気骨のようなものがうゞわれる。」

生徒の感想文は，まだ，いくつもとりあげてみたいが，生徒たちの主な感じ方考え方の傾向は上記の感想文によって，ほとんど代表されていると思うので，これだけにしておく。

5　「舞姫」および「浮雲」の指導に対する反省

以上の報告のように，私は2学期の大部分の時間をかけて，この二つの作品の鑑賞指導を行なった。当初の目標や意図が，具体的な実践によって，どれだけ達成されたか，また，どんな点に問題があったか等については，きびしく反省してみなければならない。

次は，「浮雲」の指導が終わってから行なった簡単なアンケートとその結果である。

「『舞姫』や『浮雲』のような明治期の作品を今後読んでみたいと思いますか。」という問いに対して，

㋐「思う」と答えたものは114名中86名　(75%)

㋑「思わない」と答えたものが28名 (25%)

という結果であった。

こうした結果をみると，適切な，教材の与え方，指導の仕方によって，生徒たちが日頃敬遠して，「食わずぎらい」の状態になっている明治の諸作品に興味をもたせ，読書を促すことが，大いに可能であるように思われる。

さて，指導の反省について述べなければならないが，まだ，十分にまとめてみることができないので，主な反省点だけを箇条書きにしておきたい。

（1）授業中の表情や発言，指導後のアンケートや感想文によってみると，多数の生徒たちは，かなり主体的な態度で作品を鑑賞し，興味を感じたり問題意識をよび起こされたりしているように思う。私としては，予想以上に当初の目標に近づきえたのではないかと思った。これは，それらの近代文学の古典が，生徒たちの心に現代的な意義や新鮮な魅力を感じさせる要素をもっているからだと考えられる。すなわち，これらの作品は教材としての価値が高いからだといえるのではないか。そうであれば，私たちは，日常の国語科の授業や読書指導などにおいて，もっと自信をもって，この種の作品をとりあげ指導を行なうのがよいと思うのである。

（2）指導の方法としては，語句や文体などのとっつきにくさを克服することを，まず考えるべきだと思った。正確な読解にの上に立って，生徒ははじめて自信をもって，作品ととりくみ，鑑賞を深めていくことができるのである。したがって，「明治文学」を教材として取り扱う場合には，作品鑑賞のための読解力指導の技術を研究しなければならないと思う。

（3）作品に関係のある参考資料をできるだけ多く準備し，有機的に利用したいと思ったが，実際には，時間不足などで，十分に使うことはできなかった。しかし，生徒が自主的に読むことができるようにするためにも，ゆたかな資料を与える必要があると思った。とくに，明治の時代的，社会的背景に対する生徒の問題意識や疑問に答えうるような資料，つまり文学以外の歴史的，社会科学的な資料を用意すべきだったと思う。

（4）授業中，生徒に質問や意見など活発に発言させることをつとめたつもりでも，生徒の中からは，もっとグループ討議などの形で話し合いたかったという感想が出た。こうした生徒の意見を今後はとり入れるようにしていきたいと思う。

（5）今回は高校3年生を対象とした授業であったが，高校1年の段階から文学教育の効果的な計画を立てて，指導を行なうことが必要だと思った。そうすば，文学鑑賞の能力や文学史的な認識力を身につけさせうるのではないかと思う。

（6）教科書の教材，とくに文学教材は，作品の原文とよく校合して，正しい鑑賞ができるものを用意しなければならないことを痛感した。

以上の他，反省すべきことはまだたくさんあるが，関連教材である漱石の「それから」の指導を終えたときに，しっかりまとめることにしたい。

Ⅴ あとがき

日本近代文学の古典としての明治文学が，現在の国語教育の中で，「古典」からは除外され，「現代国語」からは疎外されている。私は，情緒的に，明治の時代にこだわっているわけではなく，国語教育の内容に関連して問題を感じているのである。

国語教育は，文学鑑賞，作文，読解，文法等とともに，文学の歴史や文章の歴史等も指導しなければならないと思う。「現代国語」においては，明治以後の主要な作品をとり上げながら，近代文学や近代文章の変革の過程を，系統的に，しかも，いきいきと認識させるような指導を考えなければならないと思う。そう考えると，現在のように，明治の作品を疎外することは許されないはずである。

明治文学には，内容的にも，文体的にも，いわゆる古典文学や現代文学にないような特質があって，それが，文学教材として非常に有意義なことに思われる。私は，「舞姫」や「浮雲」の指導を通して，そのことを強く感じた。「現代の作品よりも新鮮な魅力を感じたのはなぜだろう。」「なぜ，もっと早くから読まなかったかと，悔やまれるほどだ。」などと，生徒たちは「浮雲」の感想文の中で述べている。また，現代文とちがった文体のとっつきにくさや語句のむずかしさなどを克服することに，よろこびや自信を感じた生徒が多かった。例えば，「舞姫」の授業に対して，「先生からあまりていねいに説明されると，幼児が食べものをかみ砕いて与えられるようで，自分で味わう興味が薄れます。」というような感想文があった。なお，1学期の始めに，蒲原有明の象徴詩を習ったときにも，生徒たちが，くり返し読んでいるうちによくわかって興味が湧いたという感想を述べたことが，関連して思い出される。こうした，生徒たちの感想をみると，時代的な古さや，文章のとっつきにくさなどの理由で，教科書編集者や教師が勝手に明治文学を「現代国語」から敬遠するのはまちがっていると思う。

私は文学教育について理論も方法もよくわかっていないが，文学教育の意義の大きさと，文学教材の選択の重要性は強く感じている。すぐれた文学を鑑賞するとき，生徒たちは作品の提起する問題を，自分の生き方と結びつけて考え，自分の判断をもとうとする。そうした過程が，生徒たちの人生観や社会観を育て，人格を形成していくために大きな意義をもつのだと思う。文学教育の目標は，「個人の尊厳を重んじ，真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに，普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない」という教育基本法の目標と結びつけて明確なものにしなければならない。そのような大きな目標を目ざしながら，直接的には，生徒たちが人生や社会についていきいきと考え，しかも，鑑賞や読解の力を身につけていくような文学教育を考えなければならないと思う。文学教材の選択の基準もそのような観点から明確にされなくてはならない。すぐれた教材を，型にはまらず，時代的な新しさ古さにとらわれず選び出すことがまず必要であり，そして，その教材に即した指導方法を考えなければならない。私自身としては，「舞姫」「浮雲」の経験を出発点として，明治文学の中からできるだけ文学史的な系統をたどりながら探がし求めてみたいと思う。

私は，以上のことを書いてきながら，自分の実践や考え方に対して，ひとりよがりの甘さを感じつづけ，はずかしくてたまらない気持である。とくに，生徒の感想をどう理解するか，作品からよび起こされた生徒の問題意識や考え方をどう発展させるかの大切な点が，まだよくわからないのである。歴史的また社会的な観点から現実をきびしく認識する能力の必要性を痛感させられる。このような私の未熟さやひとりよがりを克服するには，生徒の感想を冷静な態度で正しく分析したり，同じような実践にたずさわる多くの教師との交流の中で，きびしい批判をうけたりして反省し，さらに実践を重ねていくこと以外に方法はない。実践と反省を，多くの国語教師とともに，くり返していくことによって，指導の理論や方法を明らかにし確かめていくことができるにちがいない。